



Title	看護師のプロフェッショナリズムとケアリング [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	小野寺, 美希子
Citation	北海道大学. 博士(経営学) 甲第13715号
Issue Date	2019-09-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/76364">http://hdl.handle.net/2115/76364</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Onodera_Mikiko_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

## 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経営学）

氏名 小野寺 美希子

### 学位論文題名

#### 看護師のプロフェッショナルリズムとケアリング

プロフェッショナル（専門的職業人）は、高い専門性を基にクライアントの問題を解決することが求められているが、彼らの職務行動を方向づけるのが「職業的アイデンティティ、信念、価値、態度の総体」としてのプロフェッショナルリズムである。環境の複雑性が増し、科学技術が発展するにしたがい、プロフェッション（専門的職業）の領域が広がっていることを考えると、職業人のプロフェッショナルリズムを醸成することは重要なテーマである。

しかし、これまでの研究において、どのような仕事経験がプロフェッショナルリズムを促進するのか、また、プロフェッショナルリズムがどのように職務行動を規定しているかについての検討は十分とはいえない。本研究の目的は、対人援助領域におけるプロフェッショナルである看護師が、①どのような経験を通していかなるプロフェッショナルリズムを獲得しているのか、②プロフェッショナルリズムはどのようにケアリング行動に影響を与えているかを検討することにある。

本章は7章から構成されている。第1章では、研究の背景および先行研究の課題を踏まえて、研究目的を説明した。対人援助職に焦点を当てたのは、新しいプロフェッションが生まれている領域であることに加え、公益サービスへの貢献や他者援助の要素を含むプロフェッショナルリズム概念を検討する上で適していると考えられるからである。また、看護師を分析対象とした理由として、対人援助職の中でも比較的早期にプロフェッショナル化したこと、ケアに関する専門家であること、ケアリングという職業固有の行動が要求されることが挙げられる。

第2章では、プロフェッショナルリズムの先行研究についてレビューした。具体的には、プロフェッションやプロフェッショナルリズムの概念や次元を説明した上で、プロフェッショナルリズムの決定要因および結果要因に関する実証研究を整理し、先行研究における課題を明らかにした。すなわち、これまでの研究においては、①プロフェッショナルリズムの次元が並列的に扱われ、次元間の関係が検討されることが少なく、②人材の成長に影響を及ぼすといわれる仕事経験との関係が分析されておらず、③組織適合行動や職務固有行動への影響が十分に解明されていないという問題が存在する。

第3章では、上記の課題を受けて、リサーチクエスションと研究モデルを提示した。具体的には、「仕事経験は、どのようにプロフェッショナルリズムに影響を与えているのか（RQ1）」「プロフェッショナルリズムは、どのように職務行動に影響を与えているのか（RQ2）」というリサーチクエスションを挙げ、この問いを検討するために、「仕事経験

→プロフェッショナルリズム→プロアクティブ行動→ケアリング行動」という因果関係に基づくモデルを提示した。このとき、プロフェッショナルリズムとケアリング行動の直接的関係も想定し、また、仕事経験とプロフェッショナルリズムの関係はキャリア発達段階によってモデレートされると考えた。

第4章では、リサーチクエスチョンおよび研究モデルを検討するための定量的・定性的な方法について説明した。本研究では、看護師(439名)に対する質問紙調査データを統計的に分析することに加え、職務経験年数が20年以上の看護職15名に対するインタビュー調査データを質的に分析した。

第5章では、プロフェッショナルリズムの基盤となる職業的アイデンティティが2タイプのプロアクティブ行動(ポジティブフレーム、上司との関係構築)を媒介して2タイプのケアリング行動(親密性、専門的技術)に与える効果を検討するために、看護師に対する質問紙調査データを共分散構造分析によって検討した。分析の結果、職業的アイデンティティは、ポジティブフレームを媒介することで親密性のケアリング行動を高めていた。また、職業的アイデンティティは、上司との関係構築を媒介して親密性と専門的技術のケアリング行動を促進していた。これに対し、職業的アイデンティティはケアリング行動に対して直接的な影響を与えていなかった。

第6章では、仕事経験がプロフェッショナルリズムに与える影響、およびプロフェッショナルリズムがプロアクティブ行動を媒介してケアリング行動に与える影響を検討するために、看護師に対するインタビュー調査データをグラウンデッド・セオリー・アプローチによって検討した。分析の結果、看護師は、キャリア初期における「クライアントへ関与した経験」を通して、献身性のプロフェッショナルリズムを獲得し、それをベースにして、キャリア中期から後期にかけて「専門性を追求する経験」を積むことで、自律性のプロフェッショナルリズムを獲得していた。さらに、献身性と自律性のプロフェッショナルリズムは、2タイプのプロアクティブ行動(職場環境の改善、上司への支援要請)を媒介するとともに、直接的にも3タイプのケアリング行動(親密な関与、エビデンスの探求、専門的技術の提供)を促進していた。

第7章では、本研究における発見事実、理論的貢献、実践的貢献、および研究の限界と今後の課題を検討した。本研究の第一の貢献は、プロフェッショナルリズム研究の基盤となっているHall(1968)の5次元モデルを、「献身性」と「自律性」という高次のレベルで類型し直したことである。第二の貢献として、定性的な分析を通して「クライアントへの関与経験→献身性のプロフェッショナルリズムの獲得→専門性を追求する仕事経験→自律性のプロフェッショナルリズムの獲得」という逐次的かつ段階的な学習プロセスを明らかにしたことを挙げるができる。第三の貢献は、定量的・定性的な分析を通して、プロフェッショナルリズムが、プロアクティブ行動を通して、また直接的にケアリング行動を促進していたことを示した点である。今後の研究課題としては、本研究で明らかにされたモデルを、他の対人援助職や専門職を対象とした調査を通して一般化すべきことを挙げるができる。